

1 三崎町の取組

町では、豊かな自然に触れ、農作物を育てたり、漁業体験、ボランティア活動等の社会体験等を通して豊かな心や「ふるさと三崎」を見つめ、気づき、考え、深めることによって、ふるさとを知り、ふるさとに親しみ、ふるさとを愛し、ふるさとを誇りに思う人間の育成を目指して、次の3点についての体験活動に取り組む。

- (1) 自然、文化、歴史、伝統、産業などの地域素材を通して、三崎町を見つめる学習
- (2) 自然体験、社会体験、生活体験、ボランティア体験活動などを通して、ふるさとで生きて働く学習
- (3) 地域人材、地域施設の積極的な活用
特に中学校では、地域の特性を生かした体験的な学習を通して、生き生きと活動する生徒の育成を目指した。

2 串中学校の取組

本校は、学級数3、生徒数22名、教職員数11名、へき地2級の小規模校である。地域の学校教育に対する関心は高く、何事にも協力的である。

(1) 体験活動のねらい

社会奉仕体験活動を通じて、公共心や公德心、及び郷土の自然を守ろうとする心を育てる。
自然体験活動を通じて、地域の自然を再発見すると共に、地域への愛着心と誇りを育てる。
職業・就業に関わる体験活動を通じて、自分の生き方や地域の将来を考える心を育てる。
交流体験活動を通じて、お互いに理解し合うと共に、思いやりやいたわりのある心を育てる。

本校では、生徒の実態調査を行い、その結果から課題を見つけてねらいを設定していった。

<生徒の実態>

- ・ 海で泳いだり魚を釣ったりすることはよくしているが、刺身料理を作ったことがない。
- ・ 基幹産業である漁業の手伝いをしたことがない。
- ・ お年寄りや幼児の世話をあまりしたことがない。
- ・ 登山やスキー、スケートなどをしたことがない。

また、「豊かな体験」の捉え方についても話し合い、共通理解を図って活動計画を立てていった。

「豊かな体験」とは？

- ・ ふるさと三崎を愛し、ふるさと三崎を大切にする活動
- ・ 生徒の感性や心が豊かになる活動
- ・ 考え方や人生観が変わるような強烈な感動を体験する活動
- ・ 自分の生き方を振り返ったり、将来の生き方に影響を与えたりする活動
- ・ 感性を十分に活用することのできる活動
- ・ 意図的・計画的に実行しないと、普段では(この地域では)体験できない活動

生徒の実態や推進地域の取組などを考えて、今年度は「ふるさと三崎を愛し、ふるさと三崎を大切にする活動」に重点を置いて取り組んだ。

(2) 年間計画

14年度体験活動計画

学年等	体験活動名	期日・単位時間等	活動の場所
全学年	海岸清掃	通年(月1回) 1単位時間	串・正野海岸
〃	天草採り・天草干し実習	5月 4単位時間	串海岸
〃	ウニ採り実習	7月 4単位時間	串海岸
〃	独居老人訪問	9月 4単位時間	校区内独居老人宅
1年生	水産教室	10月 6単位時間	佐田岬漁港周辺
全学年	独居老人訪問	11月 4単位時間	校区内独居老人宅
〃	ウインタースポーツ体験	12月 6単位時間	中山町・松山市
3年生	保育実習	1月 6単位時間	三崎・二名津保育園
2年生	職場体験	2月 6単位時間	三崎町内

豊かな海がすぐそばにあり、学びの場として活用しやすいという地域の特性を生かして、海と関わる活動を多く取り入れた。また、生徒の実態を考えて「独居老人訪問」、「保育実習」や「ウインタースポーツ体験」も計画に組み込んだ。

(3) 教育課程上の位置づけ

学 年	1年	2年	3年	
総合的な学習の時間	70	70	76	
講 座	共通講座 豊かな体験	22	22	28
	選択講座 郷土の研究	48	48	48

学年	活 動 名	時間	特別活動
全校	海外清掃 月1回	10h	生徒会活動
1年	水産教室	6h	学校行事
2年	職場体験	6h	学校行事

それぞれの活動のねらいを考えて、総合的な学習の時間と特別活動に分けて位置付けを行った。本校では、総合的な学習の時間に共通講座と選択講座を設け、豊かな体験活動を共通講座として実施した。それぞれの体験活動の計画や準備などは、関連する選択講座の生徒が中心になって行うようにした。

(4) 活動の概要

天草採り・天草干し実習

・ねらい「地域の自然と触れ合い、ふるさとのよさを体で味わう」

磯で海産物を採取する経験の少ない生徒の実態から、地域の特産物である天草採りを実施した。漁協の協力を得て禁漁区を開放していただき、生徒たちは思いっきり活動することができた。この時、漁協職員の方を講師に招き、天草の見分け方や採取の仕方等について指導していただいた。活動してみると、5月ということもあり、海水がまだ冷たく長時間海に入っていられないことや、胸の辺りまで海につかれないと採れないという事態に直面し、海士たちの苦勞を感じることができた。また、採取の途中で、天草は根本から採ってはいけないことを講師の方から教えていただき、闇雲に採るのではなく、次回の採取のことまで考えて採ることの大切さも知った。

天草は、水洗いと天日干しを繰り返し、白くなるまで続けることで初めて食材として活用することができる。天気がよければ、10日間ほどで白くなるが、毎日の世話はなかなか大変である。そこで、これらの作業を学年ごとで当番として行い、全員で協力しながら食材にしていっていった。



独居老人訪問



・ねらい「お年寄りとの触れ合いを通して、相手を思いやったりいたわったりする心を育てるとともに、主体的に関わろうとする態度を育てる」
9月と11月の2回、約50件ある独居老人宅を訪問した。訪問の際に、運動会の案内状などと一緒に手作りのプレゼントを渡したいということで、5月に採取した天草を使ってデザートを作り、配布していった。思いがけないプレゼントに、お

年寄りの方に大変喜んでいただき、会話も弾んで交流を深めることができた。また、11月には生徒が栽培したサツマイモを使った料理と、花の苗の鉢植えをプレゼントすることができ、生徒たちも達成感を味わうことができた。

ウニ採り実習

・ねらい「海の幸に恵まれた、ふるさとのすばらしさを肌で感じ、ふるさとを大切にしようとする心を育てる」

7月初旬の馬糞ウニの解禁日に合わせて、ウニ採り実習を行った。地域の方を講師として招き、ウニの見つけ方や殻の割り方などを指導していただいた。当日、波が高かったにもかかわらず、班で協力しながらやや小ぶりの馬糞ウニをたくさん採ることができた。採取したウニは、岩場ですぐ殻を割って身を取り出し、ワタをのける細かい作業も根気強く行っていった。採取した身は漁協の加工場に持っていき、そこで職員の方に瓶詰め作り方を教えていただいた。今年は3本の瓶詰めを作ることができ、給食の時間にみんなで味わいながら活動を振り返っていた。



海岸清掃

月に一回、生徒会が中心になって、学校周辺の海岸に打ち上げられた流木や空き缶、ペットボトル等を回収したり除草作業をしたりしている。海の自然と向き合うことの多い本校では、清掃活動を通して自分たちの手で郷土の自然を守り、郷土を愛する心を育てたいと考えて取り組んでいる。

(5) 活動の評価

生徒の活動の様子、自己評価表、指導者及び生徒の感想、体験活動発表会などをともに、関心・意欲・態度、表現を観点として評価する。

<生徒の感想>

天草採り・天草干し実習

- ・ 禁漁区では、貝類や海草類などをたくさん見ることができ、人の手が加わっていない海は本当にきれいだなと実感しました。
- ・ 自然のままの海はとても感動的でした。でも、ごみがたくさん流れ着いていたのが残念でした。僕たちの手でこの海を守っていくために、海岸清掃にもっと力を入れていきたいと思いました。
- ・ 予想以上に採るのが難しくて、海士さんたちの苦労が少し分かりました。

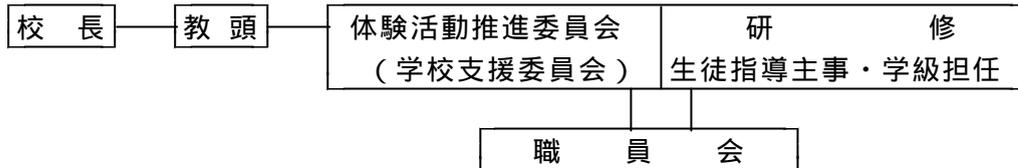
独居老人訪問

- ・ 来年はお年寄りの方にも学校へ来ていただいて、自分たちの知らないことをもっと教えて欲しい。

- ・ 天草ゼリーを喜んでもらえて嬉しかった。苦労して採取した甲斐があった。ウニ採り実習
- ・ みんなと協力してできた。波が高かったが、予想以上にウニを採ることができて楽しかった。
- ・ ふるさとのきれいな海と触れ合えて嬉しかった。ずっときれいな海であって欲しい。
- ・ ウニについてもっと詳しく知りたくなった。紫ウニと馬糞ウニを比較してみたい。

(6) 学校支援委員会の取組

推進体制



学校支援委員会の構成

教職員（校長、教頭、研修）3名、PTA役員（会長、副会長）3名、区長2名、老人会役員3名、三崎漁協役員1名、町文化財保護委員1名、校区内有識者5名

活動内容

- (ア) 学校の体験活動実施に伴う支援活動計画の決定
- (イ) 各種活動の連絡及び調整、指導支援範囲の検討
- (ウ) 経費・保険等の検討

学期ごとに会を開き、それぞれの立場から率直な意見や感想を出してもらい、共通理解を図りながら体験活動を実践していった。話し合いの中で、

- ・ 漂流物から環境問題を考えてほしい。
- ・ 豊かな自然の幸に恵まれているこの地域が、一方では厳しい自然環境の中にあり、先人の生活や知恵から「生き方」を学んでほしい。
- ・ 郷土の史跡を散策しながら、ふるさとの歴史や文化を学習して欲しい。

といった提言があり、体験活動への期待の大きさがうかがえる。

3 活動の成果と今後の課題

(1) 活動の成果

地域の特性を生かした体験的な学習を通して、地域の自然や文化、産業等を見つめ考える生徒が次第に増えてきている。これは、ふるさとを見つめ、ふるさとを愛する心が育ってきている表れと言える。

地域の方の協力により、学校と地域の一体化が図られ、活動に広がりや深まりをもたらせることができた。

(2) 今後の課題

体験活動と各教科等との関連性や教育課程上の位置付け等について、今後さらに検討していく必要がある。

体験を重視する余り、その活動が生きる力へとつながっていくための事前・事後指導が疎かになりがちである。事前・事後指導の時間を確保しつつ、充実した活動になるよう計画を再検討する必要がある。

「豊かな体験活動」を推進するためには、豊かな体験をしている教師、または体験しようという意欲のある教師が必要である。教師の意識改革と研修の充実を図ることが大切である。